

シリーズ「遺跡を学ぶ」

168

倭人伝に記された 伊都国の実像

三雲・井原遺跡

河合 修・平尾和久
新泉社



倭人伝に記された

伊都国の実像

―三雲・井原遺跡―

河合 修・平尾和久

【目次】

第1章	鏡の王国と「魏志」倭人伝	4
1	鏡の王国	4
2	「倭人伝」に記された伊都国の姿	9
第2章	伊都国形成期の糸島	13
1	稲作開始のころ	13
2	王権誕生への胎動	16
第3章	三大王墓と伊都国の墓制	20
1	三雲南小路王墓の発掘	20
2	三雲南小路王墓の出土品	23
3	被葬者像を探る	29
4	幻の王墓・井原鍵溝遺跡	32
5	伊都国域の墓制	37
6	最後の伊都国王墓・平原王墓	41
7	平原王墓の出土品	48
8	平原王墓の時代	59
第4章	伊都国の国邑	60
1	三雲・井原遺跡の規模と変遷	60
2	三雲・井原遺跡を特徴づける出土品	69
第5章	王都をとりまく拠点集落群	76
1	海と陸のネットワークを探る	76
2	拠点的な弥生集落	78
3	これからの三雲・井原遺跡	90
参考文献		92

編集委員

勅使河原彰(代表)

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

第1章 鏡の王国と「魏志」倭人伝

1 鏡の王国

大量の鏡を副葬した三つの弥生王墓

今をさかのぼること約二〇〇年前の、文政五年（一八二二）二月二日のこと。当時、福岡藩領であった筑前国怡土郡三雲村（現在の福岡県糸島市三雲）で考古学上の重大な発見があった。三雲村農長の清四郎宅の南隣、細石神社後方三十間ばかりの南小路の畑で、土塀を築くための土をとっていたところ、三尺余（約一メートル）の深さで、鋒を上にした状態で一本の銅剣が掘り出され、その脇に銅戈一本、その下に朱が詰まった小壺、さらに掘り下げると巨大な甕棺が掘り出されたのである。のちに「三雲南小路王墓」とよばれるようになる弥生時代中期後半の墳墓が発見された瞬間であった。

その後、この大甕（甕棺）のなかからは、古鏡大小三五面、銅矛大小二点、ガラス勾玉と多量のガラス管玉、ガラス璧といった豊富な副葬品が掘り出された。この顛末は、福岡藩の国学者であった青柳種信が著した『柳園古器略考』において、出土品が個別に図入りで説明され、銅鏡の銘文が隸書であることから漢から伝わったものであるなど、考古学的な考証を加えて記録されている。

その『柳園古器略考』には、三雲南小路王墓が発見される四〇年ほど前の天明年間（一七八一〜一七八九）にも、三雲村と境を接する井原村内の「鏝溝」とよばれた地点で、朱などととも「壺」が発見され、そのなかから古鏡数十、鏝の板のごときもの、刀剣類が出土したとの伝聞も記されている。この発見当時の遺物は現存が確認できないが、発見した次市という農民の家に当時保管されていた遺物について拓本と模写図が残されており、それによると銅鏡は一九面以上、大型の巴形銅器三点が出土していたことがわかる。

この天明年間に発見された墳墓については、現在



図1 ●糸島半島から望む玄界灘
糸島半島から玄界灘の西方沖を望むと壱岐島（一支国）や松浦地方（末盧国）などをみわたせる。

までその位置が特定されていないが、副葬品の内容から弥生時代後期前半の厚葬墓（多くの副葬品とともに手厚く葬られた有力者の墓）と考えられ、現在は「井原鏡溝王墓」とよばれている。

そして江戸時代の発見から一四〇年以上たった一九六五年一月のこと。今度は三雲南小路王墓から北西に一・四キロほど離れた、曾根丘陵の先端にあたる平原集落裏手の畑において、さらなる大発見があった。当地でミカンの植樹のために溝を掘削していたところ、突如、朱とともに地中から湧き出るかのように多量の銅鏡片群が出土したのである（図2）。弥生時代終末の厚葬墓「平原王墓」の発見であった。

この発見の報告を契機に、糸島出身の考古学者、原田大六氏を調査主任として発掘調査が開始され、その結果、これら大量の鏡片は墳丘をともなった方形周溝墓（1号墓）の副葬品であったことが判明する。平原王墓からは、日本最大級の超大型内行花文鏡をはじめとする三九面分（後に四〇面分と修正される）の銅鏡片やガラス製品、素環頭大刀など、日本列島における弥生時代の厚葬墓としては随一ともいえる豊富な副葬品が出土した。



図2 ● 平原王墓における銅鏡の出土状況
多量の銅鏡の副葬は、伊都国の歴代王墓の特徴といえる。平原王墓では40面分もの銅鏡が割れた状態で出土した。

「三雲南小路王墓」、「井原鏡溝王墓」、「平原王墓」、これら三つの墳墓の共通点は、数十面もの多量の銅鏡を副葬していることである。弥生時代の墳墓の副葬品のなかでもとくに重要視されたのは銅鏡であるが、その銅鏡をひとつの墳墓に数十面も集中して保有し、限られたエリアの三つの墳墓でじつに一〇〇面近い銅鏡が出土していることになる。このように銅鏡が集中して出土する地域は、ほかにはない。いかにこの地域の弥生時代の首長層が銅鏡を好み重要視していたかのあらわれといえるだろう。まさに「鏡の王国」がこの地に存在していたのである。

玄界灘に突き出た「龍の首」糸島

これらの王墓が所在するのは、福岡県糸島市。糸島市は、九州の北部に位置し、北は玄界灘に面し、西を佐賀県唐津市、東を福岡市に接する、現在は人口一〇万人ほどの市である（図3）。地理的には朝鮮半島まで直線で二〇〇キロあまり。日本列島のなかで、中国大陸・朝鮮半島に距離的に近く、玄界灘の海上交易における要衝の地であり、古代より現代にいたるまで大陸との文化・経済・政治的な交流の結節点として重要な役割を担ってきた。

その地形は、玄界灘につきでた半島の形から「龍の首」と称されることがある。波荒い玄界灘によって形成された海食崖と砂浜が交互に展開して風光明媚な海岸線が続き、大小の入り江が多く分布する。糸島半島の付け根には東西から内海が大きく切りこみ、古来は波静かな天然の良港が形成されていた。

引津湾や加布里湾、深江湾など、玄界灘沿岸の臨海部には、縄文時代後期以降、多くの貝塚

や港津集落が形成された。糸島の人びとは、さまざまな資源獲得や交易・交換活動のため、船をつくり海峡を東西南北に往来しており、糸島を起点として北は壱岐・対馬そして朝鮮半島・中国大陸へ、西は松浦から西北九州、東は福岡平野ひいては日本海沿岸部や瀬戸内・近畿へ、南は陸づたいに有明海沿岸部へと直接的・間接的に広範囲な交流をおこなっていたと考えられる。

一方、南方は標高一〇〇〇メートル級の脊振山系の山なみがつづき、山の麓の平野部、とくに糸島最大の怡土平野には弥生時代以降水田が営まれ、農業生産力においても秀でた地域である。まさに天然の海の幸、山の幸両方に恵まれた地域であった。

糸島は、南北で大きく二つの地域に分けられる。玄界灘に突き出た半島部である北のシマ地域と三方を山に囲まれ平野部を擁する南のイト地域である。両地域の間には東西にのびる幅一キロほどの帯状の低地があり、かつては「糸島水道」とよばれる海峡があったと考えられてきた。現在では、貝化石の分布や遺跡調査などにより、中央部の志登から泊の間は東西から入り込んだ湾にはさまれて陸橋状につながっていたと考えられており、糸島水道の存在は否定されている。

イト地域は時代を経るにしたがい伊都↓伊靱・伊斗・怡土・伊刀↓糸などと表記がかわるが、とくに怡土平野を中心に全時代を通じてイトとよばれてきた地域である。

イト地域は中国の史書『三国志』魏書・烏丸鮮卑東夷伝の倭人条、通称「魏志」倭人伝（以下、「倭人伝」）に登場する「伊都国」と音が同じであり、前述したような「倭人伝」の時代に相当する弥生・古墳時代の多数の遺跡が存在していることから、伊都国の比定地とされる。

つまり、先述した多量の鏡を副葬した三つの王墓は、「伊都国」の王墓であり、これらを擁した怡土平野を中心に伊都国が存在していたと考えられるのである。

2 「倭人伝」に記された伊都国の姿

伊都国関連の記事

前述のように、糸島は伊都国の故地と推定されるが、本項では伊都国が「倭人伝」のなかで、

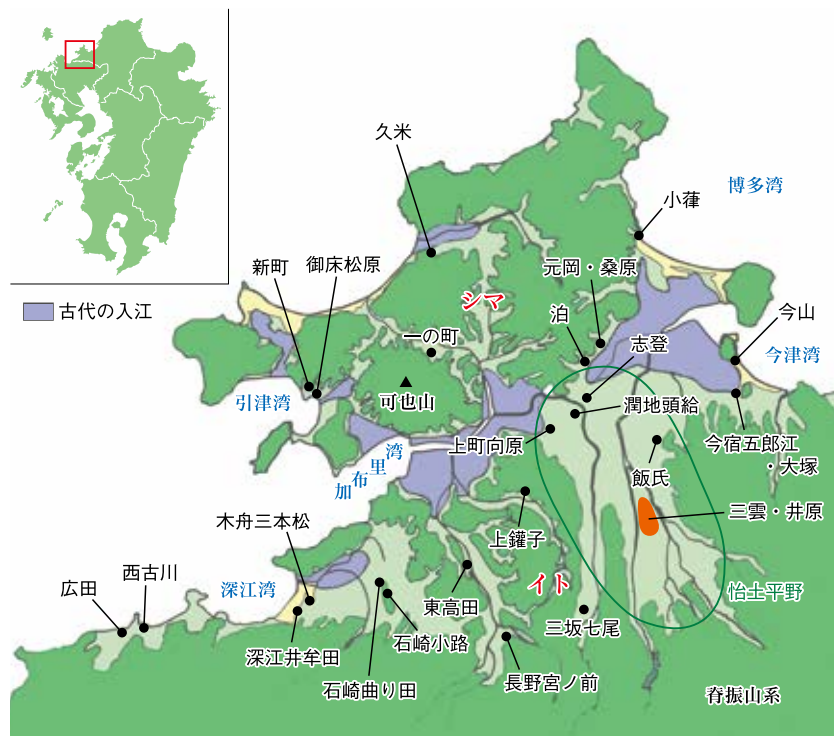


図3 糸島の地形と弥生時代の主要遺跡
玄界灘沿岸の入江や小平野・河川流域単位の各地に弥生時代の拠点となる遺跡群が分布し、糸島最大の平野である怡土平野に伊都国の中心集落である三雲・井原遺跡が存在する。

実際にはどのように記述されているのかをみていきたい。

「倭人伝」における「伊都国」関連の記事には、のべ一一文字が使われている。「倭人伝」全体で文字数は二〇〇〇字ほどしかないなかで、ほかの国々とくらべると突出した文字数であり、倭における伊都国の存在の大きさがあらわれている。

伊都国の名が登場するのは、まず、「倭人伝」の前半、倭の様子と邪馬台国までの行程をあらわしたくぐり、対馬国、一支国、末盧国へと至ってからのつぎの行程の部分である（図4）。

（末盧国から）東南陸行すること五百里。伊都国に到る。官は爾支といひ、副は泄謨、柄渠くさといふ。千余戸有り。世々王有り。皆、女王国に統属す。郡使往来し常に駐する所。

この記述を整理すると、伊都国の位置は、末盧国（あるいは末盧国の海域から）東南に陸行で五百里の位置にある。これは末盧国を唐津・松浦地方であったと想定すると、方位にずれがあるものの、距離的にも伊都国を糸島に比定する上で大きな問題はない。

また、伊都国の行政官は爾支、副官は泄謨と柄渠の計三名体制である。「倭人伝」に記された玄界灘とその沿岸地域の国々（対馬国・一支国・末盧国・奴国など）では、その行政官については官副二名体制が基本であるが、伊都国は副官を二名配置した計三名体制であり、官副四名体制の邪馬台国について多いことになる。

それに対して、伊都国の戸数は、「千余戸」であり非常に少ない。ほかの国々の戸数をみる

と対馬国が千余戸、一支国が三千許家、末盧国が四千余戸、奴国においては二万余戸、不弥国は千余家、そして投馬国が五万余戸、邪馬台国は七万余戸であり、伊都国は最少の戸数である。これについては、現在糸島で確認されている弥生時代の遺跡の範囲や分布密度との対比から「万余戸」の誤記であったのではないかとの見方がある。

また、「世々王有り」以下の記事は、伊都国には代々の「王」がいて、みな女王国に統属していたと解釈されるが、「倭人伝」のなかで「王」の存在が確認できる国は、伊都国と邪馬台国、狗奴国以外にはみられない。伊都国には官副の名が記された行政官とは別に、代々の王統が存在していたことを示している。

さらに、「（魏の）帯方郡の使者が往来し、常に駐在しているところ」という内容も重要であろう。伊都国が倭の国々の大陸交渉の窓口であり、使者を迎賓する国として機能していたことをあらわしている。

次に「倭人伝」のなかで倭の政治・交易体制を記した部分にも伊都国の名が登場する。



図4・「魏志」倭人伝にあらわれる国名と推定位置
「倭人伝」に記された国々のうち、対馬国・一支国・末盧国・伊都国など玄界灘の国々の位置については、その記述内容から地域を特定できる。

女王国より以北は、特に一大率いちだいらつを置き檢察し、諸国はこれを畏憚おそす。常に伊都国に治す。國中に於ける刺史ししの如く有り。王が使を遣わし、京都、帯方郡、諸韓国に詣らす、及び郡が倭国に使用するに、皆、津に臨みて搜露そうろす。文書、賜遺しの物を伝送し女王に詣らすに、差錯さくするを得ず。

以上の記事には、伊都国には女王国以北の国々を檢察する「一大率」がつねに置かれ、諸国はこれを畏れはばかつていたとある。伊都国は、倭の国々のなかで外交窓口として港津を擁し、対外交渉の要衝としての役割を担っており、周辺諸国を監察する軍事的な拠点としての性格ももち合わせていたのである。

このように、「倭人伝」の記事からは、代々の「王」の存在や「一大率」の設置など、倭のほかの国々とは異なる伊都国の特徴を読みとることができる。二〜三世紀を通じて、中国および倭の国々のなかにおいても伊都国が特別かつ重要な存在として認識されていたのであろう。このような倭における伊都国の重要性を裏づけるような証拠として、先述した三大王墓のほか、怡土平野においては、伊都国の国邑（王都）にあたる三雲・井原遺跡の存在が知られており、また、近年の発掘調査などにより糸島の各地に同時代の拠点となる重要な遺跡の所在とその内容が明らかになってきている。

次章からは、こうした倭人伝の記述を裏づける、三大王墓と王都、そして周辺の遺跡群の様相をみていこう。